

辺境領主 成り上がる！ は大貴族に

チート知識でのびのび領地経営します

3

Author
潮ノ海月

Illustrator
すみしま

レイモンド・エクムント
王国南部に領地を持つ辺境伯。
アクス同様、若くして爵位を
継いだ。

スイ
アクスに命を助けられ、
仕えることになった忍。
転移魔法の使い手。

アクス・フレンハイム
父の突然の戦死により、
領地を継いだ青年。
前世の日本の知識で次々に
功績をあげ、伯爵となった。

オーラル
魔法王国で賢者と
呼ばれる実力者。
アクスの知識に興味津々。

コハル
アクスに拾われた
もふもふ魔獣。
三本の尻尾が
チャームポイント。

アウラ
とある犯罪組織の頭領の一人。
アクス達を襲撃するが……

リーファ
アクスの噂に興味を
持ちやってきました。
好奇心旺盛なハイエルフ。

第1章 貧乏貴族

俺はアクス・フレンハイム、前世の日本での記憶を持つ転生者だ。

リンバインズ王国の南部、トルーデント帝国との国境沿いの一帯を領地として持つフレンハイム子爵家に生まれたのだが、ある日突如帝国が攻めてきたことで父であるバルトハイド・フレンハイム子爵が戦死。それで急遽、俺が子爵を継ぐこととなった。

その後、俺の立案した作戦で、ウラレント侯爵令嬢のエルナが率いる帝国軍は撤退。侯爵との交渉の結果、三年間の休戦協定を結び、なぜかエルナが人質として、俺の邸で住むことになった。

それから俺は、ドワーフや錬金術師などを仲間にしたリ、前世の知識を使って色々な発明をしたリ……順調に領地を発展させていく。

そんなある日、王国南部のまとめ役、エクムント辺境伯が流行り病によって急死し、俺と同一年のレイモンドが辺境伯を継ぐことになった。

その王国南部の不安定な状況につけ込むように、帝国がエクムント辺境伯領のタビタ平原に侵攻してくる。

俺とウラレント侯爵の間では休戦協定を結んだが、他の帝国貴族には、その効力が及んでいなかったためだ。

俺は仲間と共にエクムント辺境伯領に向かうと、南部諸侯の力を借りた作戦を立てて帝国軍を撃退する。

戦いの功績によって伯爵へと陞爵した俺は、レイモンドと協力し、帝国との国交を正常化。

その後は前世の知識を生かして、馬車を改良して、魔石の力で動くようにしたものや何種類か作り、量産体制を整えた。

当然、王家の耳にも入るわけで、俺は改良馬車を献上。

結果として、俺は他の貴族に改良馬車の一つである魔導車——魔石で動く自動車を売る許可を得たのだった。

国王陛下と謁見した次の日、俺はアンナを連れて、再び王宮へ向かった。

他の仲間達は王都観光を楽しんでいる。

今回、王都に来ている仲間は、クレト、スイ、カーマイン、オーラル、リーファ、アンナ、コハルの六人と一匹だ。

改良馬車の製造に携わったカーマインと、俺の幼馴染で馬番のクレトは、魔導車の運転手。

オーラルとリーファには、改良馬車を運転してきてもらった。

オーラルはベルハルム魔法王国の賢者で、リーファは『瘴気の森』に住んでいたハイエルフである。

二人から王都観光がしたいという要望があり、御者を頼むことになった。

アンナと一緒に来てもらったのは、彼女が書いた本のファンになったユリアーナ殿下が会わせろと言ってきたから。

スイは護衛だから俺から離れることはないし、コハルは心の癒しだから、俺が離れたくない。

ちなみに、俺が作った改良馬車だが……

『アクルマ一号』は、衝撃吸収だけを付加した、乗り心地のいい改良馬車。

『アクルマ二号』は、魔石を動力にした馬車——魔導車だ。デザインはバンに近い型をしている。

『ニクルマ一号』は、衝撃吸収だけを付加した改良荷馬車。『ニクルマ二号』は、軽トラ型の魔導車である。

『ニクルマ』シリーズは、『アクルマ』シリーズを、荷台に色々載せられるようにしたようなイメージだ。

今回は、『アクルマ一号』を王宮に卸し、リンバインズ王国内の市場へ商品を流すことになった。王宮が専売するのであれば、既存の馬車を製造している業者との軋轢も防げる。

一方で魔導車である『アクルマ二号』については、国王陛下は各所への影響を考えて販売を止めようとしてきたが、俺達自身で販売する許可を買った。もちろん、やりすぎないように釘は刺され

たけどな。

それから、話し合いの中で、『ニクルマ』シリーズについても、一号は王宮に卸して、二号は俺達が自由にできることにもなっている。

どう売っていくかは、腕の見せ所だ。

兵士に案内されて、今後の魔導車の売り方について考えながら来賓室で待っていると、ベヒトハイム宰相が姿を現した。

「昨日来たばかりだというのに、再び王宮を訪れるとは急用か？」

「今日はユリアーナ殿下にご紹介したい人物を連れてきました」

俺が振り向いて手をかざすと、アンナが静かに礼をする。

今日のアンナは赤いドレスを着て、いつもより大人びて上品に見える。

「この者はアンナといい、私が経営しているこいはる商会で働いている作家です。以前、ユリアーナ姫がお会いしたいと言っておられたので、お連れしました」

「それは大儀である。アンナ先生一人のようだが、クレア先生はいないのか？」

クレアはアンナの同僚の作家だけど……なぜベヒトハイム宰相がクレアのことを知っているんだ？

俺は不思議に思い首を傾げる。

「どうしてクレアのことを？」

「ユリアーナ殿下に勧められて、クレア先生の本を読んだのだ。夜のアレなシーンの描写もさることながら、貴族達の対立の臨場感といい、先生の本にすっかりハマってしまっただけだ」

ベヒトハイム宰相が頷きながら言うと、アンナは目を輝かせた。

「そうなのよ。あの子ったらキャラの動作を表現するのがとても上手いの。それを見抜くなんて、さすが宰相閣下ね。私の本はどうかしら」

「アンナ先生の本は、私のような初心者には高度すぎる」

「宰相閣下もよく分かっているじゃない」

なぜかベヒトハイム宰相は、アンナと意気投合して本について一緒に語り始めた。

堅物のベヒトハイム宰相にこんな一面があったとは知らなかったぞ。

アンナは宰相とも対等に話せるほどの傑物だったのか。

「話は分かったが、王族の住まう階へ庶民を入れるわけにいかん。私がユリアーナ殿下を呼んでこよう。待っておれ」

そう提案して、ベヒトハイム宰相は来賓室を退室していった。

しばらくすると、扉を開けてユリアーナ殿下が部屋の中へ勢いよく入ってきた。

そしてソファに座っていたアンナの両肩を掴む。

「アンナ先生、お会いしなかったですわ」

「いきなり飛びついてこないで！ 私にはその手の趣味ないから！」

アンナは強引に引き剥がそうとするが、ユリアーナ殿下は離れない。
無闇に姫殿下の身体に触れることもできないし、困ったぞ。

というかアンナ、さっきも宰相にタメ口だったけど、殿下に対してもタメ口でいいんだろうか。
でもこの状況じゃ突っ込めない。

手をこまねいて二人の様子を見ていると、遅れて来賓室へ入ってきたベヒトハイム宰相が、厳しい表情で咳払いを一つする。

するとユリアーナ殿下は我に返って、恥ずかしそうにアンナから体を離れた。

「私ったら何という無礼を。アンナ先生と会えると思ったら、気持ちを抑えることができませんでしたわ」

「姫様なんだから全力で自分を止めなさいよ。私は男同士の物語は書くけど、女同士には興味ないんだからね」

アンナはシワになった服を整えながらブツブツと文句を言う。

一般庶民に怒られてる姫殿下って、何だか立場が逆転しているような。

というか、タメ口の件は許されてそうだな。

落ち着いてきたユリアーナ殿下は、手に持っていた紙の束をアンナに見せる。

「これ、私が書いた恋愛小説です。拙いものですが、ぜひアンナ先生に読んでいただきたいと思いまして」

「あなたも書き手を目指してるのね。それなら私の同志だわ。読んであげる」

アンナは紙の束を受け取って、ペラペラとめくって内容を読んでいく。

そして読み終わると、大きく頷いてユリアーナ殿下を見た。

「普通の恋愛小説だけど、いい感じに書けるわ。あなたの力量なら、『こもれび』で本を出せるわよ。あなたも本を出さない？」

本屋『こもれび』は俺が経営するこいはる商会の店舗で、アンナやクレアの本など、作家の小説を売っている茶屋である。

アンナが言うなら、本を売れるレベルなんだろうが……

俺は片手でアンナを制した。

「ちょっと待て。俺の許可なくユリアーナ殿下を巻き込むな」

「私も『こもれび』の作家になれるのですか！ ぜひ書き手をさせてください！ 本屋の本棚に自分の本が並ぶのが夢なんです！」

アンナの勧誘を受けて、ユリアーナ殿下は目を潤ませて喜んでる。

俺の制止の声など聞こえていないようだ。

ユリアーナ殿下の夢は作家になることだと、以前聞いたことがある。

現役作家のアンナから作家になれると言われれば、夢が叶うと思うよな。

夢を壊すことはできないし、協力するしかないか。

「ユリアーナ殿下、定期的に原稿を受け取りに参ります。ぜひ『こもれば』で作家デビューしてください」

「嬉しいです。フレンハイム伯爵のご配慮に感謝いたしますわ」

ユリアーナ姫は明るい表情で満面の笑みを浮かべる。

アンナと二人で頷いていると、突然、俺の肩に手が置かれた。

振り返ると、ベヒトハイム宰相が額に青筋を浮かべている。

「フレンハイム伯爵、ちよつと執務室まで顔を貸してくれないか」

あー、王家の許可をちゃんと取らないといけなかったか？

「ベヒトハイム宰相……ここは冷静に話し合いということだ」

「いいから黙って一緒に来い」

「腕を引っ張らないでー！」

ベヒトハイム宰相に強引に来賓室を連れ出された俺は、勝手なことをするなど、執務室でコッテリと説教を受けることになった。

それから来賓室に戻り、俺とベヒトハイム宰相はユリアーナ殿下の本を出版するための話し合いを行った。

下手に姫殿下の小説を世に広めて、王家に影響がないとも言切れない。

そして話し合いの結果、国王陛下や王家への説得はユリアーナ殿下本人がすることになった。

王妃様は姫殿下の味方であり、国王陛下は姫殿下を溺愛で溺愛しているので反対はされないだろうとの見込みらしい。

ベヒトハイム宰相も国王陛下へ助言してくれるという。

愛娘に弱いのは世の父親の常だが、それで王国は大丈夫なのだろうか。

でも女の子達が喜んでいるのだから、これでいいのかもね。



王宮での用事を済ませた後は、五日間ほど王都で過ごしてから、領都フランスに戻ることになった。

滞在期間が延びたのは、王都で『こもれば』の支店を運営しているベレント商会と、仕事についての打ち合わせなどを急遽行ったからだ。

王都観光も楽しんだけど、きちんと仕事もこなしたので問題はないはず。

これで父親の代からの忠臣である、文官のオルバートに怒られることもないだろう。

そもそも王都までの移動に一ヶ月もかかったのだから、五日くらいは誤差だよな。

ちなみに、オーラルだけはもう少し王都でやることがあるとかで、数日後にスイが迎えに来ることになっている。

宿で帰り支度をしていると、クレトが呆れた表情をする。

「そういえばアクス。改良馬車を全て献上しちゃって、俺達、どうやって邸へ帰ればいいんだよ」
そう、俺達は改造馬車四台に乗ってきたのだが、全て王家に献上済みなのだ。

「別にクレトだけ走って帰ってもいいんだぞ」

「俺の足だと何ヶ月もかかるよ。何か考えがあるの？」

もちろん、帰りのことは既に考えてある。

俺は人差し指を立て左右に振る。

「スイ、出てこい」

「御意」

シュタツと天井裏から現れたスイは、片膝をついて礼をする。

スイは忍であり、いつも影から俺を護衛してくれている。

「皆を一人一人、フレンスの邸へ転送してくれ」

「無理でござる」

「え！ なんで？」

スイは俺と同じく、転移スキルの保持者だ。

一度にどれだけの重量を転移させられるかは、消費する魔力量によって決まる。

以前は自分以外の者と一緒に転移することはできなかった彼女だが、今となっては一人だけ共に

転移することができるようになっていた。そのおかげで、俺は頻繁に王都と自領を行き来しているのだ。

つまり、全く転移できないわけがないんだが……どうして俺の命令を拒否するんだ？

首を傾げていると、スイは澄ました顔で話を続けた。

「フレンスまでの距離を、人一人を抱えて転移するには、相当な魔力が必要でござる……私の魔力量的に、全員を運ぶことは不可能でござる。アンナ、カーマイン、コハルでしたら、転移できるでござる」

「その人選になった理由は？」

「単に私と仲良しかどうかでござる。私とアンナは友達でござるし、カーマインは暇な時に私の話し相手になってくれるでござる。コハルは可愛いからでござる」

スイとアンナが友達になっていたなんて全く知らなかった。

カーマインは結構、仲間の面倒見がいいからな。

コハルの可愛さ、まさに神！

まあ、重量のことを考えれば、カーマインやアンナよりもリーファのほうが軽い気もするが……余計なことと言わないほうがいいだろう。

「分かった。後の二人は何とかしよう」

「御意」

スイは立ち上がると、アンナ、カーマイン、コハルト、順番に一緒に転移していった。部屋に残っているのはリーファとクレト。

女の子を優先したほうがいいよな。

俺はリーファと向き合う。

「ここで見たことは内緒にしてくれるか？」

「何？ 言うなと言われたら、言わないわよ」

「これから俺がジャンプするから、タイミングを合わせて俺の体に掴まってくれ」

「ジャンプ？」

「いいから、やるんだ」

俺は両手をまっすぐに上げ、グルグルと回転させる。

そして、体の力を抜いて、膝を屈めてカエルのように真上に飛び上がった。

「今だー！」

その瞬間にリーファが俺の体にしがみつく。

目的地を告げた瞬間に視界が真っ白になり、俺達は邸の執務室に座り込んでいた。

部屋を見回し、リーファは俺を指差して、大声で笑い転げる。

「アハハハ、あのポーズ！ カエルみたいだったわよ！」

「うるさい。あれをしないと転移魔法が使えないんだよ」

スイに指導してもらって、体内の魔力を循環させ、長距離の転移もできるようになった。しかし、どうしてもあの動作をしないと魔法を使えないのだ。

恥ずかしい格好だから、今までスイ以外の他の仲間に見られないようにしていたのに。

笑い転げるリーファを放置して、俺はソファに座ろうと立ち上がる。

その途端、目の前がグルグルと回転して、そのまま倒れてしまった。

あれ？ 身体が重いし力が入らないぞ。

すぐく眠いような、意識が途切れそうだ。

膝をついた俺を見て、リーファが慌てて近寄ってくる。

「ちょっとアクス、大丈夫なの？」

「ああ……二人で転移したから……疲れたのかも……」

そう言えば、この距離を誰かと移動するのは初めてだったか。

そう言い残して、俺は意識を手放した。



目を覚ますと、私室の天井が見える。

どうやら意識を失ってベッドに寝かされていたようだ。



横を向くと、リーファが椅子に座ったまま眠っている。
どうして彼女が？

上半身を起こすと、部屋の片づけをしていた執事のセバスがこちらに気付いた。

「起きられましたか。体調はいかがですか？」

「ああ、ありがとう。大丈夫だ……リーファはどうしてここに？」

「アクス様が寝込んでいる間、リーファ様はずっと看病されていたのですよ」

俺達の会話が聞こえたからか、リーファが目を覚ました。

「アクス、目が覚めたのね。あなたは魔力切れで倒れたのよ。すごく心配したんだから」

「付きっきりで様子を見てくれてたんだってな。ありがとう……いきなり倒れることもあるんだな」

「魔力が枯渇して、意識不明でそのまま亡くなるケースもあるんだから気を付けてね」

えー、魔力の枯渇って、そんなに怖いんだな。

これからは魔力切れにならないように気を付けないとな。

そう心に誓っていると、天井の天井板がスーッと動き、スイが顔を出した。

「主、体力をつけるでござる。体力がつけば、魔力量も少しは増えるでござる。もしくは、転移の時は服を脱ぐでござる。その分だけ重さが減るので、転移に使う魔力量も減るでござるよ」

「毎回、転移する度に服を脱いで全裸になれって言うのか」

「そうでござる。それと夜の体力作りであれば、拙者がお相手つかまつる」

「そんな協力は要らないわ!」

スイと話していると、どうも脱線していく。

俺達二人が言い争っている、リーファはクスツと笑い、椅子から立ち上がった。

「それだけ元気なら大丈夫ね。早くクレトを迎えに行つてあげたほうがいいわ。アクスが倒れてから今日で三日目だから、王都で泣いてるかもしれないわね」

は!?

「スイ! クレトを王都から転移させていないのか!？」

「だって……クレトにはいつも忙しいと邪険にされるでござる。イジワルされたから迎えに行くのはイヤでござる」

お前は子供か!

確かにスイを邪魔扱いしてきた、日頃のクレトの行いも悪い。

しかし、そのことでへそを曲げて仲間を助けないスイにも困つたものだ。

ただ、体調が戻つたとはいえ、また俺が転移魔法を使って倒れるのはマズイ。

ゴネるスイを説得し、王都にいるクレトを転移で邸に連れ戻した。

クレトから散々に泣き言や不満を聞かされたが。

これって俺が悪いのか?

なんだかむかつくので、クレトが女子を邪険にしたことを、ジェシカに告げ口してやる。

彼女は父上の忠臣で、軍団長も務めていた猛者だ。

クレトよ、十二分に剣の特訓を受けてくるがよい。

◇ ◆ ◇

王都から戻つてきて一週間が過ぎた。

真夏の暑さがフレンハイム伯爵領に襲いかかる中、俺は王都行きの間^溜まっていた仕事をこなしていた。

この日、昼を過ぎた頃に二台の馬車が邸に到着した。

執務室の扉が開き、リーファが部屋に入ってくる。

「コシヌーケ子爵とビビルベルト男爵^{だんしゃ}が来ているわよ。アクスと話がしたいって」

「俺に何の相談だろう?」

二人の名前を聞いて、俺は首を傾げる。

コシヌーケ子爵もビビルベルト男爵も、俺と同様に王国の南部地域——カストレル連峰の一部とその麓に領地を持つ南部諸侯である。

フレンハイム伯爵領から王都へ向かう時、コシヌーケ子爵領の領地から峠道を利用している。

先日の戦などで、二人とは面識はあるが、ゆっくり話をしたことはないんだよな。

南部諸侯が邸まで来ているのに無下にするのは、貴族の礼儀としてはマズい。

子爵の機嫌を損ねれば、今後、王都へ行く峠道を使えなくなつて、遠回りすることにもなりかねない。

いきなり尋ねてくるなんて面倒な予感しかしないが、一応は会つてみるか。

「お会いしよう。二人を来客室に通してくれ」

しばらく考えた末に俺は席を立った。

来客室へ向かい扉を開けると、二人は必死に菓子頬張つていたが、俺に気付くと姿勢を正して平静を装う。

俺は何も見なかったことにして、手を差し伸べた。

「お久しぶりです、アクス・フレンハイムです」

「今、南部で一番勢いがあるとされている、フレンハイム伯爵の高名は我が領地まで届いており

ますぞ」

「フレンハイム伯爵の威勢に私もあやかりたいモノです」

コシヌーケ子爵とビビルベルト男爵は、順番に俺の手を握り、唾を飛ばして熱弁した。

悪い人達ではなさそうだが、小物の雰囲気か漂っているし、どこか貧相な感じがする。

俺は強引に手を引き抜き、作り笑いを浮かべた。

「私にできることであれば相談に乗りますよ」

「フレンハイム伯爵、我らを助けてください」

早速、二人は声を揃えて、床に手をつけて土下座してきた。

この二人には貴族としてのプライドはないのだろうか。

「事情を話してもらえませんか？」

「実は――」

困惑する俺に向けて、コシヌーケ子爵は身振り手振りを交えて、必死に説明を始めた。

南部諸侯の中でも、二人はハラデール伯爵の派閥に属していた。

そのハラデール伯爵が俺との戦いに敗れ、罪人となって王都の地下牢に入れられたことで派閥は解散。

そこで二人は、ヴァイスマン伯爵に今後の後援を頼ろうとしたが、すげなく断られたらしい。

どうやら伯爵から、個別に光金貨二十枚を上納するなら考慮すると言われたという。

光金貨二十枚といえば、日本円に換算すると約二億円。

高額だが、貴族であれば出せない金額ではない。

ここまで話を聞いて、俺は二人の狙いが何となくわかった。

コシヌーケ子爵とビビルベルト男爵の風貌からすると、それ程の資金を蓄えているように見えない。

おそらく二人は、俺から金を借りたいのだろう。

ただ、同郷の南部諸侯ではあるが、資金援助するほど親しくもないし、他の貴族に金を回すほど、フレンハイム領は潤っていない。

安請け合いですと、オルバートに怒られるし。

俺が表情を引きつらせていると、コシヌーケ子爵とビルベルト男爵は話を続ける。

「先のタビタ平原での戦いに参加した時も、妻や娘に内職をさせ、邸の家財道具一式を質に入れて、戦支度をしたほどですぞ。ほれ、私の靴下を見てくだされ。いくつもの穴を妻が裁縫してくれたのを履いているのですぞ」

「コシヌーケ子爵などはまだいい。私など靴底に穴が空いています。下着も尻に穴が空いています」

そんな情報、聞かされても嬉しくないぞ！

ある意味で正直な人達なのだろうが……

話を聞いているうちに、俺は段々と頭が痛くなってきた。

一刻も早く帰ってもらいたい。

「分かりました。とにかく靴や靴下、下着ぐらいは買ってあげますから。貧乏自慢はやめてください」

「ついつい貧乏の話になると熱く語ってしまいますな。なにせ我らには他に自慢するところがあ

りませんからな」

「いや、まったくその通りです。わははは」

陽気に笑う二人を見て、俺の体から一気に力が抜ける。

このまま二人のペースに乗せられてはダメだ。

俺は咳を一つして気分を切り替える。

「それで二人は、私に何をしてほしいのでしょうか？」

「光金貨二十枚をそれぞれに無期限、無利子で貸していただくか、ヴァイスマン伯爵との仲を仲介していただきたい」

コシヌーケ子爵とビルベルト男爵は、再び床に手をつけて頭を下げる。

簡単に光金貨二十枚ずつなんて渡せるわけがないだろ。

それも無期限、無利子って返済する気持ちが皆無じゃないか。

ムツとした俺は二人に言い放つ。

「どちらもお断りします。二人を支援する理由もありませんので」

「このまま帰れと申されるなら、我らにも覚悟がありますぞ」

「覚悟とは？」

「この邸に一生住みつき、フレンハイム伯爵に取り憑くのみ」

コシヌーケ子爵は真顔でキッパリと言い張った。

お前らは悪霊の類かよ。

めっちゃ怖いんですけど！

二人の姿を見ていると、貧乏神に見えてくる。

このままだと、本当に呪われるかも！

「……はあ、分かりました。一緒にヴァイスマン伯爵の邸まで参りましょう。その代わりに、協力するのは今回限りですからね」

「ありがとうございます」

俺の言葉を聞いて、二人は抱き合って喜んだ。

そんな二人を部屋の中に残し、俺は来客室を退出する。

そして執務室へ向かうと、リーファがソファで寛いでいた。

「あの二人、どんな用事だったの？ 急用みたいだったけど」

俺がソファに座り、手短にさっきの来客室での珍事を説明すると、リーファは大笑いする。

「アハハハ、本当に貧乏神に愛されてるのかしらね」

「キツパリと断ったほうがいいのは分かってるんだが……領地経営に行き詰まって一族離散になって、後で崇られるのも怖いしな」

「でも、彼らに手を貸したせいで領内の資金繰りができなくなったら、オルバートが激怒するかも」

「うう……それだけは、なんとしても避けないと」

「でもあの二人、正直そうだし憎めないタイプよね。本当に困っているみたいだから、協力してあげればいいんじゃない。貧乏神でも神様には変わりないでしょ」

他人事だと思つて、リーファは気軽に言い放つ。

しかし、それしか方法はないんだよな。

結局ここで断つたら、懸念していたように、コシヌーケ子爵領を通れなくなるかもしれない。

俺は盛大にため息をついて、リーファに指示してクレトを呼んできてもらった。

ヴァイスマン伯爵領に行くにあたって、魔導車の運転をしてもらうためだ。

普通の馬車で行くことも考えたが、日数がかかるので、今回はスピード重視で『アクルマ二号』を使う。

自分で運転してもいいが、貴族としての建前があるからな。

リーファも同行してくれるそうさ。

どうやら貧乏貴族が気になつたらしい。

スイにも声をかけたが、屋根裏で俺達の話を聞いていたらしく、貧乏神とは関わりたくないと言つて、一緒に行くことを拒否された。

外出の準備を整えた俺は、来客室にいる二人と合流し、邸の玄関先で『アクルマ二号』に乗り込んだ。

第2章 開発計画

ヴァイスマン伯爵は、コシヌーケ子爵、ビビルベルト男爵の二人と同じく、カストレル連峰の一部を領地に持つ貴族だ。

フレンスからは、通常の馬車で八日ほどの距離だが、『アクルマ二号』は三日で駆け抜けた。

あまりのスピードと、その乗り心地に貧乏貴族二人はとんでもなく驚いて目を輝かせていた。なにやら金儲けできないかと考えていたようだったが、余計な情報は与えないようにしておいた。

休憩ごとに、水と非常食をとり、野営時にはリーファが簡単な料理を作ってくれた。

何を食べても大喜びする貧乏貴族達を見て、クレトは呆れ顔、リーファは上機嫌だった。

ヴァイスマン伯爵の邸に到着した俺、リーファ、クレト、コシヌーケ子爵、ビビルベルト男爵の五人は、使用人に案内され、応接室で伯爵を待つことになった。

しばらくすると、ヴァイスマン伯爵が厳しい表情で現れた。

「コシヌーケ子爵、ビビルベルト男爵。何度来られても答えは変わらんぞ」

ヴァイスマン伯爵は、こちらに見向きもせず二人にそう言い放った。

俺はすかさず立ち上がり、挨拶をする。

「約束も取らずに邸を訪問したこと、まずは謝罪いたします。私はアクス・フレンハイム、他の者は私の家臣達です」

背後に立っているクレトとリーファを示すと、ヴァイスマン伯爵はちらりとそちらに視線を移した後、顔を俺に向ける。

「フレンハイム伯爵のことは存じている。同じ南部諸侯だからな。先の戦の際も、直接話す機会はなかったが、今後もよろしく頼む……それで、今回はどのようなご用件なのかな？ コシヌーケ子爵とビビルベルト男爵が同行しているということは、二人に泣きつかれたか？」

「左様です。ヴァイスマン伯爵との仲介をお願いされまして」

「フレンハイム伯爵にまで迷惑をかけるとは」

ヴァイスマン伯爵は険しい表情で、コシヌーケ子爵とビビルベルト男爵にジロリと鋭い視線を送る。

すると二人は一斉に顔を背け、クレトを見つめた。

当然、ヴァイスマン伯爵の視線もそちらに向かい、それに慌てたクレトを見て、リーファが両手で口を覆い、笑いを堪えている。

その様子に、ヴァイスマン伯爵は大きく息を吐いてから、首を左右に振った。

「フレンハイム伯爵には手数をかけた。できれば二人で話をしたい。別室へ移ろう」

「そのほうが話が早そうですね」

俺はコクコクと頷き、ヴァイスマン伯爵と共に応接室を後にした。

別室のソファに座ると、ヴァイスマン伯爵はため息をつく。

「コシヌーケ子爵とビビルベルト男爵には困っているのだよ。ハラデテール伯爵がいた頃は、二人はそちらに相談していたようだが、伯爵が捕縛されて以来、私のほうへ相談を持ち込むようになってな。その度に資金を工面して貸し付けていたのだが、一向に返済の目途もない」

なんだか、聞いていた話と違うぞ。

「どのような資金を貸したのですか？」

「最初は領地を開墾する費用を貸し付けたのだが、山崩れで作業が頓挫したな。河川に橋を設置する費用も出した。しかし大雨で堤防が崩れて建設中の橋が流された。他にも色々と貸し付けたが、どれも不幸な事故で頓挫している。あの二人が事業をしようとすると、なぜか上手くいかんのだよ。彼らが私から騙し取っているわけではないことは分かっている。しかし、こちらも資金的に余裕はないのだ」

ヴァイスマン伯爵は話をしながら両手で頭を抱える。

二人が領内で事業をすると、天災が降りかかるなんて。

まるで本当に貧乏神に憑かれているようだな。

話を聞いているだけでも、段々と怖くなってきた。

ヴァイスマン伯爵は大きく息を吐き、両手で頭をかく。

「そして何より、派閥の件だ。コシヌーケ子爵もビビルベルト男爵も領地が近い私に派閥を組んでくれと言ってきているのだが、元々二人はハラデテール伯爵の派閥。私は二人と組むつもりもない、これ以上は頼られても困るのだ」

「事情は理解しました」

「分かってくれたか。ではフレンハイム伯爵、あの二人のことをよろしく頼む」

「それは、ちょっと遠慮したいというか……お断りします」

俺は顔を引きつらせて、両手の平を前にして制止する。

一応、これでも仲介役としてヴァイスマン伯爵に会いに来たのだ。

後のことは伯爵に任せて、早く領地に帰りたい。

……しかし、このままでは二人の不幸に巻き込まれて、ヴァイスマン伯爵の人生が詰みそうな気がする。

俺は胸の前で両腕を組んで少し考えてから、口を開いた。

「正直なところ、コシヌーケ子爵、ビビルベルト男爵の二人とは、私も手を組むつもりはありません。かといって、ヴァイスマン伯爵のお話も聞いた以上、何も聞かなかったことにもできません。

二人の領地の開発については、私も協力いたしましょう。領地が順調に開発できれば、後のことは

何とかなるはずです」

「フレンハイム伯爵、感謝する……私一人では不安で……」

ヴァイスマン伯爵は頭を下げ、肩を震わせる。

よほど二人の扱いに追いつまれていたのだろう。

不憫すぎる。

ヴァイスマン伯爵の気持ちが落ち着くまで二人で談笑し、その後に応接室に戻るのだった。

ソファに座った俺は、ヴァイスマン伯爵と共に、今回だけコシヌーケ子爵とビビルベルト男爵の領地開発に協力すると告げた。

まずは二人の領土について、詳しく聞いていくことにする。

「ではコシヌーケ子爵の領地について教えてください」

「私の領地はカストレル連峰のクロック火山の近くです。荒地を開墾して農地にしようと頑張ったのですが、大規模な山崩れが起きましてな」

「私の領地も連峰の麓です。河川を整えて、荒地に水を供給しようとしたのですが、大雨で堤防が決壊しました」

ヴァイスマン伯爵の証言と一致してるな。

天災なので、二人の責任ではないが……不運すぎだろ。

「それで私やヴァイスマン伯爵に、何を望まれますか？」

「それは資金援助ですぞ」

二人は目をキラキラと輝かせて、俺とヴァイスマン伯爵を交互に見る。

ヴァイスマン伯爵は目を合わずに俯いて、両拳を握り締めている。

これまでの資金がことごとく無駄になり、本人達のせいではないとはいえ、ここまで悪気なく更なる援助を求められては、ストレスが溜まるだろう。

二人を追い返すためなら資金を渡せばいい。

しかしそれをすれば、今後も金策が苦しくなる度に協力を求められる。

どうしたものかと悩んでいると、リーファが挙手する。

「子爵も男爵も、事前計画がちゃんと組まれていないんじゃない？ ピンポイントで災害の被害に遭うなんて、調査不足でしょ」

「そうかもしれないな。お二人は開発される土地を詳細に調べられたのですか？」

「もちろん調査には行きましたぞ」

「私もきちんと、見に行きました」

俺の質問に、二人は目をキョロキョロさせて挙動がおかしい。

これは怪しいな。

「専門家を同行させましたか？ 例えば山を開墾するなら、その山に詳しい専門家。河川を整備す

るなら土木の専門家などに話を聞きましたか？」

「そのような者達を雇う資金はありませんな。所持していた剣も既に売り払っております」

「左様、私も鎧を質に入れました」

コシヌーケ子爵とビビルベルト男爵がまた貧乏自慢の話始めた。

ツボったようで、キャハハとリーファが大笑いする。

素人の二人が専門家の意見も聞かずに、思い込みだけで工事を決めたのか。

環境も考えずに、計画も立てない。

これでは何をしても失敗するのは明らかだ。

天災だから仕方ないと思っていたが、避けられたんじゃないのか？

貴族は世襲制だから、幼少の頃から領地経営についての基礎を学ぶことになるし、俺もオルバートから今も教わっている。

しかし、コシヌーケ子爵家もビビルベルト男爵家も昔から資金繰りが苦しく、二人は領地経営の知識が乏しいのかもしれないな。

ヴァイスマン伯爵と視線を合わせると、意図を察したように頷く。

「腰を据えて叩き込む必要があるそうだな」

「そうですね。リーファ、頼めるか？」

「いいけど、一日で教え込むなんて無理よ」

リーファの言葉に、ヴァイスマン伯爵が頭を下げる。

「フレンハイム伯爵、何日でも邸に滞在してほしい。この二人に領地経営を学ばせねば、私達の未来はない」

「では二人に基礎だけでも叩き込んでもらっている間に、私の領地から専門家を呼び寄せませう」

俺はクレトに指示し、『アクルマ二号』でフレンハイム伯爵領へ戻り、カーマインとドルーキンを連れてきてもらうことにした。

まだまだ複数人での転移に慣れていない俺では、二人を連れてくるのは無理だからな。

俺の指示を受けて、クレトはヴァイスマン伯爵に礼をして邸を飛び出していった。

それから俺、リーファ、ヴァイスマン伯爵は交代でコシヌーケ子爵とビビルベルト男爵に、領地経営の基礎を教えることになった。

しかし、二日目にヴァイスマン伯爵が挫折し、三日目に俺も諦めた。

二人の物覚えが予想以上に悪かったからだ。

何度教えても、要点を間違えて理解していく。

それなのにリーファはニコニコと微笑み、楽しそうに二人に教えていた。

「誰にだって失敗はあるわ。間違いを素直に謝るし、可愛いじゃない」

リーファの趣向は理解できないが、とにかく彼女に任せることにしたのであった。

◇ ◆ ◇

『アクルマ二号』が出発して五日後、クレト、カーマイン、ドルーキンの三人が邸に到着した。「大梓の話は、ここに来るまでに聞いてはいるが、具体的に俺達は何をすればいい？」さっそくカーマインがそう聞いてくる。

「これからコシヌーケ子爵とビビルベルト男爵を連れて、二人の領地へ視察に行く。現場に着いたら地域について、二人は調査をしてくれ。その後に具体的な開発計画を立ててもらいたい。詳細については行き道で話す。クレトは休んでいいぞ。よく頑張ったな」

「アクスに褒められても嬉しくないや」

クレトは顔を横に向けて、髪をかく。

男のツンデレなんて可愛くないよ。

コシヌーケ子爵領は、『アクルマ二号』で向かえば一日の距離だ。

ビビルベルト男爵領は隣領となる。

俺、カーマイン、ドルーキン、貧乏貴族二人は魔導車に同乗し、コシヌーケ子爵領へと出発した。

現場に到着してすぐに、山崩れが起きた場所の近隣に住む住民に、周辺地域について聞き込みを行い、カーマイン、ドルーキンが開墾についての意見を擦り合わせる。

そんな二人の様子を見て、コシヌーケ子爵とビビルベルト男爵はニコニコと微笑んでいた。

この後、自分達で事業計画を立てることを忘れていたようだ。

そして夕暮れとなり、コシヌーケ子爵から邸に招待すると言われたが、キツパリと断った。

下着も買えないほど困窮しているのに、俺達が押しかけるわけにもいかない。

子爵がよくても、家族にとつては迷惑だろ。

……それに、邸に滞在している時に、余計な頼み事をされても困るからな。

というわけで、俺達はその足で、ビビルベルト男爵領へ向かうことにした。

『アクルマ二号』には大きなテントを二つ装備しているので、野営ができるのだ。

一つのテントを貧乏貴族に貸したので、今回の遠征の間、俺、カーマイン、ドルーキンは同じテントを使うことになった。

ささっと夕食を済ませてテントに入る。

夕食で酒を飲んだドルーキンは寝つきが早く、いびきがうるさい。

カーマインはこのうるささに慣れていられなく、グツスリと眠っているが、俺は寝不足になった。早くフレンハイム領に戻って、コハルと一緒にベッドで眠りたい。

コハル成分が不足して、悲しくなってくる。

翌朝、ビビルベルト男爵領へと出発し、昼過ぎには現場に到着した。

男爵が言っていた通り、河川の橋は流され、堤防が決壊している。

川の土砂が流れこんで、周辺は乾いた泥だらけだ。

惨状を見てドルーキンが唖然。

「堤防を改修、土壌の改善となれば大掛かりな土木工事になるぞい」

「フレンハイム伯爵領なら、土木専門の職人も多いし、土魔法士もいるんだがな」

カーマインの言う通りではあるが、その職人達を連れてくるのにも費用がかかる。

こちらで工面することもできるが、そこまで肩入れしていいものか。

本来は貴族である領主を中心に、領内に住む民衆が協力して、領地を改善していくのが好ましい。一度、邸に戻ってヴァイスマン伯爵と相談したほうがいいだろう。



調査を終えた俺達は、『アクルマ二号』を走らせ、二日後にはヴァイスマン伯爵の邸へと戻った。

「フレンハイム伯爵、現場の状況は？」

「二人の言う通りでした」

「では、別室で調査の詳細を聞こう」

ヴァイスマン伯爵に案内され、俺、リーファ、カーマイン、ドルーキンの四人は、会議室へと移動した。

もちろんコシヌーケ子爵とビビルベルト男爵も会議に参加してもらう。

元々は二人の問題だからな。

クレトには『アクルマ二号』の点検してもらっている。

『アクルマ二号』を気に入ったクレトは、馬番の仕事の合間にカーマインから、色々と機械の整備を教わっていたので適任だ。

室内に入り、皆が着席すると、カーマインが話し始めた。

「コシヌーケ子爵領の開墾の件だが、急こう配になっている山肌を無理に開発しようとしたため、土砂崩れが発生したようだ。現場から三百メートルほど離れた地点であれば、斜面も緩やかで、全てを平坦にするのではなく、段差を設けて土地を整備すれば、開墾も上手くいくだろう」

「うむ、ビビルベルト男爵領の現場は堤防の一部が崩れているから、今は河川の水量が少ないので氾濫の危険はないが、早急に補修工事をする必要があるのう。それに流れ込んだ泥を撤去して土壌を入れ替えねば、農耕地としては使い物にならんぞ」

カーマインとドルーキンの説明を聞いて、ヴァイスマン伯爵は難しい顔をする。

「どちらの現場も、工員を募集しなければならん。綿密な事業計画を立てねばならん」

「それについては俺とドルーキンに任せてほしい」
カーメインがそう言うが、俺は首を横に振った。

「二つの領地の領主はコシヌーケ子爵とビビルベルト男爵だ。あくまでも二人に計画を立ててもらう」

「私達には無理ですぞ」

俺の言葉に貧乏貴族達は悲鳴を上げる。

しかし、今後も貴族として領地を管理経営するなら、二人には頑張ってもらおうしかない。

もちろん、協力はするけどな。

俺はリーファに視線を送る。

「カーメインとドルーキンと一緒に二人のことを任せたい」

「もちろんよ。キチンとした計画が組めるまで、スパルタで教え込むわ」

「ヒィー！」

リーファが笑いかけると、コシヌーケ子爵とビビルベルト男爵は怯えた表情を浮かべて抱きしめ合う。

俺達が視察に行ってる間、何があったんだ？

俺とヴァイスマン伯爵は退室し、応接室に移動して話し合いを続けることにした。

資金援助の配分も検討しないといけないし、貸した金をどうやって貧乏貴族達から回収するか。俺達二人は頭を悩ませた。

資金の配分については、不平が出ないように、互いに五割ずつと決まった。

返済についてはヴァイスマン伯爵から提案があった。

ヴァイスマン伯爵領は茶葉の生産を行っており、王国中に販路がある。

そこで、新しく開墾した耕地で茶葉を栽培させることを考えているようだ。

そしてその茶葉をヴァイスマン伯爵が買い取って王国内で販売し、利益の中から資金を回収するという。

茶葉の生産については、ヴァイスマン伯爵が指導するというので、お願いすることにした。

とはいえ、茶葉の利益だけでは、全ての資金を回収するのに、とんでもない時間が掛かりそうなんだよな……

そこで俺はあることを思いついた。

二人の領地は、カストレル連峰のクロック火山の近くにある。

もしかすると、地中深くまで掘ると温泉が湧き出すかもしれない。

それを利用して、観光地になるような温泉街を作るのだ。

こっちの世界で温泉の話聞いたことはないが、可能性にかけてみてもいいだろう。

そのことをヴァイスマン伯爵に説明すると、試してもいいと賛同してくれた。

温泉の採掘については、俺が資金を出すことになった。
発案したのは俺だからな。

実際の街作りとか、採掘の手段については、カーマインとドルーキンの二人に任せておけば大丈夫だろう。

オーラルは賢者だし、温泉を探す魔法を知っているかもしれない。

俺達二人は会議室へ戻り、皆に温泉の案を説明した。

するとカーマインとドルーキンも乗り気で、コシヌーケ子爵もビビルベルト男爵も喜んでいた。というわけで、リーファ、カーマイン、ドルーキンの三人に貧乏貴族の教育を任せて、俺はフレンハイム領に帰ることにした。

オルバートに無断で既に半月以上も領地を空けている。

このまま長居していると確実に怒られるからな。

クレトに運転してもらい、俺を乗せた魔導車はヴァイスマン伯爵の邸を出発した。

◇ ◆ ◇

それから三日後、フレンハイム伯爵領に到着した俺は、オルバートに捕まり、予想通り説教を受

けることになった。

久しぶりにコハルを抱き枕にして熟睡した俺は、翌朝にオーラルとクレトを執務室へ呼び寄せた。

「最近、カーマインとドルーキンの姿も見えないけど、二人に何か頼んだのかい？」

「実は――」

コシヌーケ子爵領とビビルベルト男爵領の件を説明すると、オーラルはクツクツと笑いを堪えている。

「それは面白い展開になっているね。そういうことなら僕も協力するよ。地中を探知する魔法を知ってるからね」

「よろしく頼む。それじゃあくレト、ヴァイスマン伯爵邸まで『アクルマ二号』の運転を任せた」

「えー、イヤだよ。もう二往復もしてるんだぞ。それに、向こうでもずっと運転してたのに。俺も邸でゆっくりしたい」

「疲れているのは分かるが、他の者達は領内のことで手一杯なんだ。特別報酬を渡すからさ」

懐から革袋を取り出して、数枚の金貨を見せると、クレトは「分かった！ やるよ！」と目を輝かせる。

これからもクレトにはヴァイスマン伯爵の邸まで往復してもらうこともあるからな。

お小遣いをあげるぐらいはいいよね。

「さて、スイ、話を聞いてたな」

そう天井に呼びかけると、スイはすぐに降りてきた。

「二人に同行してヴァイスマン伯爵領へ向かってくれ」

「イヤでござる。せっかく主が邸に戻ってきたのに、もっと二人でラブラブしたいでござる」

「今までも、いちゃついたことなんてないだろ。それに俺の護衛を断って邸に留まったのはスイじゃないか。スイが最初から一緒に来てくれていれば、転移でオルバートに今回の件を伝えることもできたんだぞ」

「アクス様は魔法で転移できるのでござるよ」

あっ……そうか。

転移魔法を使って俺一人でオルバートへ報告に戻ってくればよかったのか。

「……いいからヴァイスマン伯爵の邸まで行つてくるんだ」

不満を言うスイを強引に説得して、オーラル、クレトと共に出発させるのだった。

三日後の夜、スイが魔法で邸に転移してきた。

クレトは再度、現場を調査するため、オーラル、カーマイン、ドルーキンの三人と一緒に、コシヌーケ子爵領とビビルベルト男爵領へ向かったそうだ。

リーファからの伝言によると、貧乏貴族二人は、順調に領地経営の勉強を続けているらしい。

それから三日間隔で、スイが状況を報告してくれた。

そして十日後、スイが封書を持ち帰った。

内容を確認すると、コシヌーケ子爵とビビルベルト男爵からの計画書と、ヴァイスマン伯爵からの援助資金の金額が記載されている手紙だった。

計画書の内容では、予定通り茶畑を作ることになったらしい。

俺はオルバートを執務室へ呼び、二人で資金について話し合う。

「援助と言いますが、採算は取れるんですか？ 景気がよくなつてはいますが、フレンハイム伯爵領も、資金繰りにそれほど余裕はありませんよ」

「分かってる。前も話したけど、出資についてはヴァイスマン伯爵と折半にしたんだ。領地の開発が進んで、温泉を発見できればキツチリと返済されるさ」

「そこまで信用してよいのですか？ 借金を踏み倒すのも貴族ですよ」

「コシヌーケ子爵とビビルベルト男爵の人柄を見てきたが、抜けたところはありますが正直者だ。悪人ではないよ。それは信頼していい」

「分かりました。資金は用意いたしましょう。ただし、温泉場ができた時には、私も旅行に行きたいですね」

不安を漏らすけど、オルバートも温泉に興味があるんじゃないか。

セバス、ジェシカ、ボルドは父上の頃からの忠臣で苦勞をかけているし、できれば他の家臣達も温泉に連れて行ってあげたいな。

慰安旅行の計画をしてもいいだろう。



貧乏貴族二人の計画書とヴァイスマン伯爵の手紙の内容を確認し、スイに資金を預け、ヴァイスマン伯爵の邸へ転移してもらって五日が経った。

スイの報告ではコシヌーケ子爵領とビルベルト男爵領で、土木作業員の募集が行われているそうだ。

多くの民が集まり、三日も経たずに人数が揃ったそうだ。

どちらの領内も、際立った特産品はないからな。新しい特産品ができるということで、期待している人々も多いのだろう。

給金がキチンと貰えるなら、ある程度の民が集まると思っていたが、予想以上に貧乏貴族二人は人望があったみたいだ。

そして三日後には、本格的に開発が始まった。

コシヌーケ子爵にはカーマイン、ビルベルト男爵にはドルーキンが開拓のサポートについているそうだ。

オーラル、リーファ、クレトの三人は、温泉探しに取りかかっているらしい。

ヴァイスマン伯爵は茶葉の栽培を指導する職人を集め始めたという。これでやっと軌道に乗ってきたな。

一週間後、リーファ、オーラル、クレトの三人が、スイの転移魔法で邸に戻ってきた。

『アクルマ二号』はカーマインとドルーキンに預けてきたようだ。

「どうして戻ってきたんだ？」

「だって領地経営の基礎は終わったもの。工事が始まれば、力仕事ばかりだから私のやることもないし」

「温泉の探知もできたし、僕の仕事も終わったからね」

「俺はもう邸で休むからね」

「協力してくれてありがとう。ゆっくり休んでくれ」

三人は大きく頷くと、執務室から去っていった。

すると、スイが上目遣いで俺を見る。

「私も？」

「まだダメだ。開発が順調か、工事が終わるまで、スイはカーマイン達との連絡係を続けてくれ」
「えー！」